

外部評価報告書の掲載にあたって：謝辞

当研究所は、2020年度の事業計画において、外部評価を実施することを決め、賀平（本学と大学間協定を締結済みの復旦大学）、土屋洋（名古屋大学大学院）のお二人の外部有識者にその依頼を行った。具体的には、2017～2019年度の3ヵ年を対象として、事業計画書、事業報告書、成果物としての『国研紀要』（第150号～第155号の計6冊）、および『国研叢書』（第4期第2冊から同第4冊までの計3冊）をお渡しして、書面による評価を依頼した。賀氏には、主に社会科学の視点からの、また土屋氏には人文科学の観点からの評価を依頼し、この度、以下のような評価報告書をご提出いただいた。

研究機関に限ったことではないが、組織等の発展にとって、外部からの評価の視点は極めて重要である。それは、特に自己評価では気が付かない点を示唆いただく上で、非常に有効な評価軸であることは言を俟たない。併せて、研究教育のグローバル化が進む中で、日本人研究者のみならず、海外の研究者からの評価を得ることは非常に重要であると考え。その意味では、今回、当研究所の成り立ちにも深く関係する中国の研究者と日本の研究者という組み合わせができたことは、誠に幸いであった。

最後に、ご多忙にもかかわらず、また、予算対応上十分な謝礼ができなかった中で、真摯にご対応いただいたお二人に、この場をお借りして、重ねて御礼を申し上げます。ご指摘いただいた点については、当研究所の今後の運営に積極的に活用させていただくことをお約束申し上げ、謝辞としたい。

愛知大学国際問題研究所長 佐藤元彦

外部評価報告書

外部評価委員 賀平

機関名	愛知大学国際問題研究所
対象年度	2017年度～2019年度
<p>愛知大学国際問題研究所在2017-2019年度の事業中、一如既往秉持践行建校和建所理念，为培育具有国际知识与视野、献身世界文化与和平的人才做出了积极的贡献，成绩斐然、卓有建树，为学界同仁所激赏。</p> <p>以下四点尤值赞佩。其一，摒弃传统区域研究与学科研究的二元分野，亦努力摆脱单一学科或理论范式的束缚，从更为开放、多元、包容的视角开展对国际问题的研究。其二，不因瞬息万变的国际局势而眼花缭乱，亦超越时事评论的应接不暇之感，突出国际问题研究的学理与思想，追求历史纵深感和空间延展性。其三，举凡学术活动和著书立说，皆有学界前辈和新锐共同参与、砥砺切磋，以此推动“不拘一格降人才”之育人目的，实现薪火相传、继往开来。其四，通过演讲会、研究会、研讨会、工作坊、连续讲座、影音会等多种形式，实现与校内各个院系和社会各界的互动和交流，避免使国际问题研究成为象牙塔中的曲高和寡抑或坐而论道式的纸上谈兵，参与代表也不局限于日本学者，充分体现“全球视野、在地思考”之宗旨。</p> <p>〈参考訳〉</p> <p>愛知大学国際問題研究所は、2017－19年度の諸事業を通じて「国際的教養と視野をもった人材の育成」および「世界文化と平和への貢献」という建学および研究所創設の理念を实践され、積極的に尽力された。その卓越的に優れた成果は、学术界が賞賛するところである。</p> <p>以下4点については殊に評価に値する。ひとつが、伝統的な地域研究</p>	

と学科研究といった二元論を排して、さらに単一の学科あるいは理論的モデルによる束縛から離れてさらに開放的、多元的、包括的視座から国際問題を討究しようと努めている点である。二点目は、目まぐるしく変化する国際情勢に惑わされることなく、また時事評論に終始することなく、国際問題研究の傑出した学術的理論と思想をもって歴史的深淵と空間的広がりを目指す点である。三点目は、学術活動および出版活動において、多様な学術世代がともに参画し切磋琢磨しながら「立場にかかわらず良い者を登用する」との人材育成の目的に向かって、薪の火が伝わるように未来を開拓され続けている点である。そして四点目は、講演会、研究会、シンポジウム、ワークショップや連続講座、さらにメディア発表など多様なチャンネルを通じて学内諸機関および学外各界と双方向の交流活動を実践し、国際問題研究を象牙の塔のなかの机上の空論や絵に描いた餅と化すことを回避している点である。なお、およそ各種活動における参加者は日本人研究者にとどまらず、「グローバルな視野と現地主義」という趣旨をも体現している。

(加治宏基・訳)

外部評価報告書

外部評価委員 土屋 洋

機関名	愛知大学国際問題研究所
対象年度	2017年度～2019年度
<p>1. 貴研究所について</p> <p>今日、国立大学に設置される研究所は、いわゆる附置研究所は長らく新設が凍結され、その他のセンター等研究施設は、2004年の法人化以降、多くが競争的資金獲得の受け皿となることが期待され、長期的で安定した研究体制を構築することが困難となっている。このような国立大学の状況に対し、貴研究所がすでに70年以上の歩みを続けてこられていることにまずは心からの敬意を表したい。</p> <p>また、貴研究所は、戦前、中国に設立された東亜同文書院大学を受け継ぐ貴学において、その現代中国を中心とした東アジア学の研究・教育機関としての特色を長期にわたって支えてこられた組織であろう。貴研究所には、今後も、日本における現代中国を中心とした東アジア研究を牽引する研究機関として、とりわけ、東アジア学関連の国立大学附置研究所等を欠く中部・東海地方において、牽引的役割を發揮していただきたい。</p> <p>2. 貴研究所の事業について</p> <p>(1) 資料の収集について</p> <p>貴学の現代中国を中心とした東アジア研究に関する蔵書は中部・東海地方において随一であり、近隣の研究者が多大な恩恵を被っていることはあらためて指摘するまでもない。したがって、望蜀の嘆となるが、収集の対象をデジタル資料にも広げられないか。近年、中国をはじめとする東アジア各地では、研究資料のデジタル化が急速に進む一方、それら</p>	

の使用料が高額にのぼり、研究者個人の研究費では負担しえなくなっている。貴研究所がデータベース等の有益なデジタル資料を導入し、所員だけでなく、客員研究員等にも利用の便を提供すれば、貴研究所の事業への参加を願う研究者も増え、貴研究所にとっても有益ではないか。

(2) 研究会、講演会、シンポジウムについて

毎年、多彩な催しを実施されており、貴研究所の研究や研究交流の成果が学术界や地域社会に還元される機会として、きわめて有意義であると思われる。とりわけ、対象年度には、台湾の学术界の活発な動きがタイムリーに紹介される企画が多く見え、一方の中国の学术界に、昨今、いささか活気が感じられないだけに、貴重な機会と感じられた。また、愛知県世界史教育研究会との共催など、中部・東海地方関連の催しも少なからず見え、研究成果を地域社会に還元する機会として、たいへん意義深く感じられた。

(3) 国際問題研究所プロジェクトについて

所員の研究プロジェクトだけではなく、客員研究員のプロジェクトも少なからず見え、近隣の研究者や地域社会にとってもたいへん有益なプロジェクトであると感じられた。

一方、貴研究所に今後も末永く存在感を発揮していただくために、継続性を有した、特色ある研究プロジェクトを育てていくことも検討してよいのではないか。例えば、貴研究所が蔵するLT貿易や満鉄関係の史料に立脚した共同研究などがまず考えられよう。この他にも、中部・東海地方における中核的研究機関である貴研究所が、この地域と中国および東アジアを結びつけるような特色のあるテーマを掲げ、これら地域の研究者と連携しながら、共同研究を牽引していくことなども考えられよう。貴研究所には、中部・東海地方ならではの現代中国および東アジア研究を、ぜひ発展させていただきたい。